KONAN UNIVERSITY

考証『文明論之概略』：「緒言」

著者	安西 敏三
雑誌名	甲南法学
巻	51
号	3
ページ	39-62
発行年	2011-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00000718

《論　説》

考証『文明論之概略』―「緒言」―

安西敏三

一　はじめに
二　『文明論之概略』全六巻
三　「緒言」の位置
四　「一身にして二生」
五　おわりに

一　はじめに

丸山眞男は『「文明論之概略」を読む』を上梓するにあたって、それがあくまで『文明論之概略』という近代日本の古典に即した思想的註釈にほかならないとし、服部之総の言葉を逆手にとって福沢惚れによる註釈であるが故に到達できる真実を述べ、日本における『論語』の古典的註釈である伊藤仁斎『論語古義』（正徳二・一七一二

年）、それに荻生徂徠『論語徴』（元文二・一七三七年）も孔子惚れによって生まれたと指摘し、とことん惚れ込んで始めて見えてくる対象の真実が、たとえ熱が醒めたとしても、持続的な刻印として惚れた人間の頭脳と胸奥に残るものであるとし、少なくとも思想書についてはそれが言えると信じていると断言している。[1] 確かにプラトン『国家』の註釈は『聖書』のそれと共に西欧思想史の一方の核とも位置づけられるが、プラトン惚れによるところ大であろうし、東アジアの思想史を考える上で不可欠である『論語』についても丸山の指摘するように孔子惚れによるであろう。日本の古典といわれる『古事記』についても「漢意」「仏意」に抗する意識があったにせよ「大和意」惚れに陥った本居宣長の手になる註釈書『古事記伝』（寛政二・一七九〇～寛政十・一七九八年）があり、これは今尚、研究者の必読の書といわれる。優れた註釈は惚れによるものでないとしても、その思想史における役割は、それが思想的であると実証的であるとを問わず、無視できないものがあると思われる。古典への註釈は一つの思想史研究の重要なジャンルといえるのである。膨大な著作の中でも取り分け名著の誉れ高い、また日本思想史上の古典として位置づけられている福澤畢生の大著となった『文明論之概略』についても註釈書が著される所以である。本稿も先人の業績を踏まえての一つの註釈を試みようとするものであるが、出来うる限り、文献との考証を主とするそれである。

二　『文明論之概略』全六巻

『文明論之概略』は明治八年すなわち一八七五年八月二十日に刊行された。脱稿に相当する「緒言」の執筆を終えたのは同年の三月二十五日であり、出版許可を得たのは四月十九日であった。初版は著者蔵版の和綴全六巻十章の構成より成り、彫工は佐脇金次郎・江川八左衛門によるものである。白抜読点を稀に付し、字体は必ずし

も統一されていないが、肉太文字の木版漢字片仮名交じり文である。紺表紙半紙版、表紙の左上隅に子持罫で囲った『福澤諭吉著　文明論之概略　巻之一』（以下巻之六まで同様）と題した題箋を貼付し、巻之一の見返しは黄色和紙に双罫の匡郭の中に「福澤諭吉著　文明論之概略　全六冊　明治八年四月十九日許可　著者蔵版」と三行に記され、左下隅に「福澤氏蔵版印」の朱印が押されてある。同年八月三十一日付の富田鉄之助宛福澤書簡には「拙著文明論之概略壱部さし上候。御一覧被成下候ハヾ難有奉存候」（書①二三〇）[2]と認められていることから、刊行一週間半ばには読者の手に届いたと推定できる。福澤自ら「福澤全集緒言」において述べているように、『文明論之概略』は古本の『太平記』と同様の大きさの文字と装丁で以て五十歳以上の古老という読み手を念頭において著わされたが故の福澤なりの工夫がそこにはみられる（①六〇）[3]。尚、明治十年には、初版二十五箇所の正誤表を付した背皮布地洋紙活版刷一冊本が刊行されている。巻之一は序言と総論に相当する議論の規準（第一章）と目的としての西洋文明（第二章）、それに文明本来の趣旨（第三章）を論じ、八十丁よりなる。巻之二以降は各論ともいうべきもので、巻之二が国民智徳論（第四、第五章）、巻之三が智徳論（第六章）、巻之四では智徳の行われる時代と場所（第七章）と西洋文明の由来（第八章）についての議論でそれぞれ五十五丁、五十三丁、五十一丁の分量があり、巻之五は日本文明史論（第九章）で、実に六十八丁にもなる分量が費やされることになり、最後の巻の六は日本独立論（第十章）で、五十三丁よりなっている。巻は便宜的なものではあれ、それなりに纏りを持っていると思われる。福澤は各章の冒頭で前章の要約を行っているが、題目自体が前章の続きを意味する章（第五章）は別にしても、巻の四の智徳の行われる場所と時代を論じているところ（第七章）は中途でのそれであり、西洋文明の由来について（第八章）は、そうした前書はない。福澤自身第十章の導入部で語っているように、第八章は第九章と共にセットともいうべき日欧比較文明史論であるが故に、同じ巻にして然るべきであっ

たからであろう。ただ改めて議論の本位を定める意味合いもあり（第七章）、さらに目的としての西洋文明を再度検証すること（第八章）から、独立の巻にしたものとも考えられる。

時代は対内的には大阪会議を経て漸次立憲政体を立てるとの詔書が、同時に反政府運動の取り締まりのため讒謗律・新聞紙条例が太政官布告として出された時期である。また対外的には台湾問題につき日清両国間互換条款が調印されたのをうけ、琉球藩に対して清国への使節派遣と清国からの冊封を廃止する命令が下され、千島樺太交換条約がロシアとの間でサンクトペテルベルグにおいて調印され、さらに朝鮮西岸において軍艦雲揚が偵察航行という名目の下、挑発による報復攻撃を受けた時期でもあった。

既に『西洋事情』（初編・慶応二・一八六六年、外篇・慶應三・一八六七年、二編・明治三・一八七〇年）や『学問のすゝめ』（初編～十四編、明治五・一八七二年二月～同八・一八七五年三月）といったベストセラーを矢継ぎ早に出していた福澤ではあったが、『文明論之概略』の構想を練り、幾重にも推敲や改稿を重ねてそれがなったことについては、夙に指摘されている。[4] 明治七年の二月二十三日の荘田平五郎宛書簡には、「私ハ最早翻訳ニ念ハ無之、当年ハ百事ヲ止メ読書勉強致候積りニ御座候。追々身体ハ健康ニ相成候テ、ウカ〳〵いたし居候てハ、次第ニノーレジヲ狭くするやう可相成、一年斗り学問する積なり」（書①二九三）と、読書勉強に努める決意が述べられ、翌年の四月二十四日島津復生宛書簡には、「実は私義洋書並に和漢の書を読むこと甚狭くして色々さし支多く、中途にて著述を廃し暫く原書を読み、又筆を執り又書を読み、如何にも不安心なれども、マ、浮世は三分五厘、間違たらば一人の不調法、六ヶ敷事は後進の学者に譲ると覚悟を定めて、今の私の知恵丈相応の愚論を述たるなり。三、五年の後に学問上達いたし候はゞ、必ず自から愧入候事も可有之、其時は又候罪を謝して別段に著述可仕存候」（書①三一九―三二〇）と『文明論之概略』を脱稿し、謙遜の念を踏まえての、文明論の執筆姿勢

とその達成感が示されている。また明治三十年『福澤全集』を刊行するにあたって、それまでの著訳が西洋の新事物の輸入とともに日本の陋習の排斥を目的とした「文明一節づゝの切売に異ならず」であったのに対し、社会が落ち着きを取り戻し、思想も熟する時期となった故、西洋文明の概略を提示し、特に儒学の流れを汲む古老に訴えて、その賛成を得、己が味方にするとの腹案を抱いて著わしたと記している（①六〇）。

『文明論之概略』の執筆過程を知る上での資料も既に明治七年二月八日と同年同月二十五日の日付がはいた「文明論プラン」と題した自筆メモが残されており（書①四〇六―四〇八）、これについての先駆的研究[5]を踏まえた丹念な研究も既に日の目をみている[6]。また註釈を踏まえた読解の研究も刊行され[7]、これを念頭に置いた解説書[8]も加わった。さらに優れた読書案内となる校註解説を付したものも出版されている[9]。加えて英訳も改めて刊行された[10]。そして註、解説、それに評説を付しての福澤諭吉入門ともなっている伊藤正雄による現代語訳についても極めて読みやすいかたちで改めて刊行されるに至った[11]。伊藤の現代語訳が苦心の手になるものであることは、伊藤が福澤研究をする上で協力を惜しまなかった富田正文を始とする慶應義塾関係者の助言を得、さらに勤務先の甲南大学での講義や演習において試訳が行われたことからも類推できる。決して一日でなったような類の現代語訳ではないのである。伊藤には原文では一般国民にとって『文明論之概略』が宝の持ち腐れに終わることに対する焦りにも似た感情があり、それだけに現代人の精神の糧とすべく平易な現代文に移し変える必要性を伊藤は痛切に感じていたのである。そうして『文明論之概略』の国民的損失を恐れ、原文で読む人のためには座右の手引書として、原文を読まない人には内容理解のために現代語訳を提供するとの意思でそれはなされたのであった。それは伊藤にとって福澤精神の真面目を現代並びに後代の同胞に伝えるべき平坦な道程を指し示すことでもあった[12]。むろんそれのみで伊藤の現代語訳の持っている意義が尽きるものではない。そこにはまた詳細な註解も付されて

おり、以後の福澤研究に資するところ大であったからである。これは前掲丸山眞男著作、また岩波文庫版の松沢弘陽註解におけるその影響において確認できるところである。伊藤の意思の持続を依然必要とされている現在にあって新たな装いのもとに現代語訳が復刊されたことは極めて意義深いといえよう。

三　「緒言」の位置

『文明論之概略』を刊行するにあたって福澤は、「文明論とは人の精神発達の議論なり。其趣意は一人の精神発達を論ずるに非ず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるものなり。故に文明論、或は之を衆心発達論と云ふも可なり」（④三）と謳った。文明論を人間の精神発達の議論と述べ、その意味するところを一人ではなく、多数者の精神を一体に集め、その発達を論ずると断じたのである。正に「衆心発達論」こそが福澤にとっての文明論であった。福澤が緒言冒頭でそのように一言したのは、書名についての説明もさることながら、本論での議論を踏まえての総括的意味を記すものであって、この種の議論が単に目新しいばかりでなく、幕末維新期から文明（ないし開化）の名の下、朝令暮改の如き状況が進行していたからである。「文明論」を「衆心発達論」と定義したのは、『文明論之概略』を福澤が著すにあたって多大な影響力を持った二つの文明史、即ち匿名英訳・ヘンリー脚注・ギゾー著『ローマ帝国の滅亡からフランス革命にいたるヨーロッパ文明史概略』（*General History of Civilization in Europe, from the Fall of the Roman Empire to the French Revolution*, by M. Guizot, Professor of History in the Faculty of Literature at Paris, and Minister of Public Instruction. Ninth American from the Second English Edition, with Occasional Notes, by C. S. Henry, D. D., Professor of Philosophy and History in the University of the City of New York. New York: D. Appleton and Company, 1, 3, and 5 Bond Street. 1870. 福澤手

沢本[13]）とバックル『イングランド文明史』二巻（*History of Civilization in England* by Henry Thomas Buckle. Volume I. From the Second London Edition, to which is added at Alphabetical Index. New York: D. Appleton and Company, 549 & 551 Broadway. 1873. 福澤手沢本、*History of Civilization in England* by Henry Thomas Buckle. Volume II. From the Second London Edition, to which is added at Alphabetical Index. New York: D. Appleton and Company, 549 & 551 Broadway. 1872. 福澤手沢本）の二著である。前者のギゾー文明史には「世間の一般の人々の意見、文明に進みつつある人々の状態」（the general opinion of mankind, the state of a people advancing in civilization）、「進み行く人々や改良と改善に向かう人々の観念」（the notion of a people advancing, of a people in a course of improvement and melioration）「社会の進歩、社会状態の改善、人と人との関係をより高く完全なものに発達させること」（the progress of society; the melioration of the social state; the carrying to higher perfection the relations between man and man）、「個人の生活の発達、人間精神とその資質の発達、つまり人間自身の発達」（the development of individual life, the development of the human mind and its faculties-the development of man himself）「それ自体、その精力、その卓越性、その崇高さを特徴とする人間の知性」（the intellectual nature of man distinguishes itself by its energy, brilliancy, and its grandeur）との用語・用法があり[14]、また後者のバックル文明史第一巻には「人類の進歩」（the progress of mankind）や「精神的進歩の法則」（the laws of mental progress）など用語・用法[15]があり、福澤が「緒言」を著すにあたって、改めて強調しておきたいと考えたのであろう。但し当初は「衆心発達論」の「発達」を記すことなく単なる「衆心論」であったことが草稿より分かる[16]。

然しながら「文明」とは既に中国古典にあっては文徳の輝くことであり[17]（『書経』舜典）、世の中が開け、人智が明らかになり、人の道が行き届くことであった（『管子』侈靡、『易経』文言・賁[18]）。元号として文明が使われる

所以である（中国唐代・睿宗期・西暦六八四年、日本後土御門期・西暦一四六九～八七年）。そうして漢代以降に展開を見せたといわれる華夷思想に則るならば、[19] 何よりもそれは五倫五常を具えた人の道の具現化した状態、即ち礼的秩序を意味し、これが中華の中華たる一面を示そう。文明の中華化である。そうして歴史意識の喚起を伴う百年の後に「文明の国」の実現を期した東夷の国の儒者も現れる所以である。[20]

ところで中華が実体として、中国古代聖王の治世と認識されていたとしても、新たな中華との遭遇に幕末期知識人は直面することとなった。すなわちアメリカ合衆国やイギリス、さらにはロシアを古代聖王の治世、即ち夏・殷・周の治世と看做し、正に「三代の治教」の具現化した国と見る人物が現れたのである。中華という用語こそないが、中華を遠い過去ではなく正に同時代の遠い地にそれを確認するのである。[21] そうしてそれが civilization の名で呼ばれているとしたならば、中華は civilization となり、それがまた文明（ないし開化）とも訳されることになる。実際、幕末期の英和辞典は、civilization を礼儀正しきこと（堀辰之助『英和対訳袖珍辞書』文久二・一八六二年）、ないし礼儀に進むことなど、礼的秩序ないし、それへの行程として、中国語訳を受けて[22]邦訳されたのである。civil が礼ないし丁寧と訳されていることもそれを裏付けよう（元木正栄『暗厄利亜語林集成』文化十一・一八一四年）。中国の非中華化と西洋の中華化の開始、あるいは中華に取って代わる新たな文明の国の登場である。[23]

ところで福澤自身の最初の文明なる語の使用例は万延元年即ち一八六〇年十二月十六日のヒュースケン事件の外交文書、即ちフランス公使館を横浜に移転するにあたってのジュンセン・デ・ベレクレールの抗議文を杉田玄端と高畠五郎と共に訳したもの（⑳四八九）を除けば、一八六四年の「東国の法律は文明諸国の説と相反せり」とのイギリス人の領事裁判の報告訳（⑳六四二）においてである。アジアの法律は文明諸国のそれとは異なっているとの文中におけるのがそれである。これは福澤における実体としての欧米文明像を脳裡に刻ませたと思われ

るが、アメリカという文明国に赴いた四年後のことであり、それ以前の一八六一年の末から翌二年の末までヨーロッパに随行して、そこで beschaving（civilization のオランダ語）の実態を認識したと思われる。

また福澤が「武備の闕を補う」ものとして、諸々の学問が「日に闢（ひら）け月に明（あきらか）」となって「我が文明の治」を助ける（①二八五）問題意識で著わした『西洋事情』（初編、慶應二・一八六六年）においても、ヨーロッパで学んだ視点が見られるし、何よりもそこにはヨーロッパの政治学者の説として「文明の政治」として六か条の要訣を冒頭に紹介しているのである（①二九〇―二九一）。福澤はバートン（John Hill Burton）の『政治経済読本』（*Political Economy for Use in Schools, and for Private Instruction for Use in Schools*, London and Edinburgh: William and Robert Chambers, 1852）の一項目 civilization を「世の文明開化」と訳し「世の文明に赴くに従て（In the state of civilization）……礼儀を重んじて情欲を制し（the evil passions are curbed, and the moral feelings developed）、小は大に助けられ弱は強に護られ（the weak are protected）、人々相信じて独其私を顧みず、世間一般の為に便利を謀る者多し（institutions for the general benefit flourish）」[24]（①三九五）と礼儀の問題としても翻訳紹介し、しかも文明国英国もまた野蛮から進歩した結果、文明国と称するまでになったが、尚、文明化の及ばない所があることを紹介しているのである（①三九七）[25]。

福澤が「文明論之概略緒言」において改めて文明の定義を下したのは、福澤が参照した前掲英訳ギゾー『ヨーロッパ文明史概略』（匿名英訳書である本書英国版初版は一八三七年、二版は翌一八三八年、いずれも Oxford の Talboys から刊行されている）[26]、及びバックル『イングランド文明史』、さらにはJ・S・ミル『代議政治論』（John Stuart Mill, *Consideration on Representative Government*, 1861）[27]、『経済学原理』（*Principles of Political Economy, with Some of their Applications to Social Philosophy*, Third Edition, 1872）など、福澤が正に食物に準えた大著をも勘案した上で

の文明概念であった。ギゾー、バックル両文明史が既存の正統的歴史叙述とは異なっているが故に、ギゾーの自称ではないが、それらは哲学的歴史（the philosophy of history）と呼ばれたのであり、[28] バックルの主観に即して言えば科学的歴史であったろう。そしてそれは党派性を排除する意味で批判的歴史（a critical history）として既にJ・ミル『英領インド史』（James Mill, *The History of British India*, Fifth Edition with Notes and Continuation, by Horace Hayman Wilson, Volume I, London: James Madden 1858、福澤手沢本）の叙述に通じるものでもあったし、さらに遡ればミルもその脚注に記しているように、E・ギボン（Edward Gibbon）にも見られる歴史叙述論にも通じよう。[29]

批判的歴史、哲学的歴史、あるいは科学的歴史は、確かに時代も異なり、それぞれ相違もあるけれども、共通して既存の歴史叙述を批判するものであった。J・ミルやギゾーはともかく、特に自然科学の手法を導入して科学的歴史を企て、そうであるが故に逆に歴史哲学と呼ばれたバックル文明史はロシアの文豪をも巻き込んでの世界的に一世を風靡したにも拘らず、アカデミーの正統史学からは批判の矢に立たされることになったのである。[30]

さて福澤は文明論の何たるかを述べつつ、人間は「局処の利害得失」に拘束されていて、物事を冷静に見ることができない。しかも「習慣の久しきに至ては殆ど天然と人為とを区別する可らず。其の天然と思ひしもの、果たして習慣なることあり。或は其の習慣と認めしもの却って天然なることなきに非ず。此の粉擾雑駁の際に就いて条理の乱れざるものを求めんとすることなれば、文明の議論亦難しと云ふ可し」（④三）と断ずる。この一文には認識における客観性の問題が含まれ、福澤がそれを意識していることが改めて理解されよう。文明論第一章冒頭部における両眼主義の問題（④一二―一三）は正に局所に捉われることなく物事を認識することに通じ、さらには習慣に捉われて自然と人為との区別が出来ない問題は文明論第二章で論ずる「惑溺」論に通じ（④三二―三

三))、あるいは「習慣に圧制せられて」(④一七)) 即ちJ・S・ミルのいう「慣習の圧制」(the despotism of custom)[31]やバックルのいう「軽信」(credulity)[32]に捉われていることの自覚にも通じよう。慣習は人為であるが自然の如き様相を呈することがあるからであって、その点の自覚なくしては物事の真理、すなわち「条理の乱れざるもの」を認識できないからである。そうして続く一文は、既に指摘されているように、バックルが文明史を著すにあたって記した“This expectation of discovering regularity in the midst of confusion is so familiar to scientific men”(混沌の中にあって規則を発見しようとするこの期待は科学的人間の常によくするところである)[33]との執筆目的のところ、及びギゾー文明史第十二講の宗教改革について論ずる冒頭部の、近代ヨーロッパにおいては全ての事柄が相互に押し付け合い、相互に触れ合い、摩擦しあいながら変容と変化していることを論じて、“What, let me ask, can be more difficult than to seize the real point of unity in the midst of such diversity,”(「このような複雑多岐のまっただ中にあって、真の統一ある核心を把握する以上に困難なことがあり得ましょうか」)[34]と論じているところが、そして「条理の乱れざるもの」との表現は『孟子』万章句下にある孔子が聖人の諸徳を兼ね備えて完成していることを称えて楽器の合奏が始から終わりまで乱れないで「条理」が通っていること―それ故に脈略があるのである―を語った一説が念頭にあったのであろう。[35]これはバックルが求めている“the universality of order, of method, and of law”(規律、筋道、原則の普遍性)、[36]あるいはギゾーのいう“the general and leading fact”(一般的かつ支配的事実)も「条理」と把握できるであろう。[37]

四　「一身にして二生」

ところで福澤は文明論の一応の定義を論じて、西洋文明と日本文明とを比較し、その相違についての着眼を要

請する。すなわちギボン『ローマ帝国衰亡史』(Edward Gibbon, *The History of Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776–1788) のフランス語訳者にして註釈者であったギゾーに相応しく、[38] 彼は西洋文明をローマの滅亡から始め、福澤もそれを受けてヨーロッパ文明を理解し、日本文明については、それを記紀神話時代から始まったとしている。曰く、「今の西洋文明は羅馬の滅後より今日に至るまで大凡そ一千有余年の間に成長したるものにて、其由来頗る久しと云ふ可し。我日本も建国以来既に二千五百年を経て、我邦一己の文明は自ずから進歩して其達する所に達したりと雖も、之を西洋の文明に比すれば趣の異なる所なきを得ず」(④三)。しかも嘉永六年、即ち一八五三年、アメリカ東インド艦隊司令長官たるペリー (M. C. Perry) 来航以来、それら両文明の遭遇が起こり、両者を比較して「人心の騒乱」の如き様相を呈したと福澤はいうのである (④三)。

西ローマ帝国の滅亡は四七六年、フランス革命は一七八九年であるから、そこに一三一三年の歴史があり、これが福澤のいう「一千有余年」であり、日本が「建国以来既に二千五百年」とあるのは、『日本書紀』にある神武天皇の即位から数える皇紀であって、これは明治五年に定められたものであり、西暦に換算すれば紀元前六六〇年が元年であるから明治八年、即ち一八七五年は単純計算で皇紀二五三五年となる。両者とも文明の進歩は長期に亘っているけれども、日本文明は西洋文明に比較すれば、様相が異なる。

福澤によれば日本文明が異質文明に接したのはペリー来航を以って始としているが、無論、日本はそれ以前に異質文明に接していた。他ならぬ福澤自身が高く評価している蘭学という西洋文明があったし (④四〇七)、ペリー来航以前にも既に文政八年、即ち一八二五年に幕府が諸大名に外国船の打ち払いを指令しているのである。けれども文化接触をも含めた大変革を起こしたのはペリー来航である。ペリー来航一年後には日米和親条約を調印し、和親条約はまたアメリカのみならず引き続きイギリス、ロシア、オランダとも調印し、さらに安政五年、即

ち一八五八年には日米修好通商条約を締結しており、以後オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも修好通商条約を締結するに至り、その意味合いはそれ以前の外国船の日本接近とは意味が全く違うのである。しかも福澤は「ペルリ寄航抜粋訳」として所謂『ペルリ提督　日本遠征記』（Francis L. Hawks, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*, New York: D. Appleton, 1857）の一部を邦訳しているのである（⑦五六〇―五六三）。福澤におけるペリーの位相が分かるというものである。

さて福澤によれば異質文明との遭遇は、第一が儒教および仏教の中国からの伝来、第二が黒船来航であったと述べ、尚且つ前者はしかしアジアに由来する故、粗密の問題であるが、後者はキリシタン伝来―一八世紀初頭の豪傑儒者の献策に見えるように「切支丹宗門の書籍を見る人なき故に、その教如何なる事という事を知る人なし」[39]であって、断絶性が甚だしかった―、あるいは蘭学の興隆について触れることなく―「蘭学書生と云へば世間に悪く云はれるばかりで」（⑦七五、『福翁自伝』明治三十二・一八九九年）において確認できるように一般社会への浸透は無に等しかった―、あらゆる点について異質なものであった。最近の外交に伴う大変動は「地理の区域を異にし、文明の元素を異にし、その元素の発育を異にし、その発育の度を異にしたる特殊異別のものに逢ふて、とみに近く相接することなれば、我が人民に於いてその事の新にして珍しきは勿論、事々物々見るとして奇ならざるはなし、聞くとして怪ならざるはなし。これを譬へば極熱の火を以って極寒の水に接するが如く、人の精神に波瀾を生ずるのみならず、その内部の底に徹して転覆回旋の大騒乱を起さざるを得ざるなり」（④三―四）である。正しく欧米文明との日本文明との接触は「極熱の火」と「極寒の水」とが接するような、人の精神に波瀾のみならず「転覆回旋の大騒乱」を引き起こさざるを得ないほどのものであったのである。この「人心騒乱」の事跡に現れたものは「王制一新」即ち明治維新（慶應四・一八六八年）であり、廃藩置県（明治四・一八七一年）

である。しかしこれで止むものではない。確かに「兵馬の騒乱」は数年前に終焉した。しかし「人心の騒乱」、即ち精神の革命状況は今なお依然として「日に益々甚だし」というべき様相を呈しているのである。正に精神革命の真っただ中に居るのである。

西洋文明を導入する熱意は、それと並び立つか、あるいはそれを超えることなくしては止む事なき営為のみならず、目標としている西洋文明が進歩の過程にあることを思うならば、息づく暇はない。しかも「日新の説」を西洋の学者は唱えているのである。この「日新の説」は『大学』第二章三にある新民を説明する殷の湯王の盤の銘にある「苟に日に新なにして又日に新たなり」を参照したものと思われ、朱熹によれば間断なく日々道徳的に修養する意味で使用されており、『学問のすゝめ』第九編にも「西洋諸国日新の勢を見るに」（③八九）とあるが、ここはギゾー文明史第二講にある文明の急速な進展をを説明するのに用いた“from day to day”を『大学』の用例を援用して訳したと思われる。[40] 従って文明の議論を立て、条理が乱れないものを求めるのはギゾーではないが至難の業である。西洋と起源を異にしている場にあっては尚更であり、それは改進というよりは正しく始造なのである。[41]「人心の騒乱かくの如し。世の事物の粉擾雑駁なること殆ど想像すべからざるに近し。此の際に当て文明の議論を立て条理の紊れざるものを求めんとするは学者の事に於て至大至難の課業といふべし。西洋諸国の学者が日新の説の説を唱へてその説随って出れば随て新たにして人の耳目を驚かすもの多しといへども千有余年の沿革に由り先人の遺物を伝へてこれを切磋琢磨することなれば仮令其節は新奇なるも等しく同一の元素より発生するものにて新にこれを造るにあらず。これを我国今日の有様に比して豈同日の論ならんや。今の我文明は所謂火より水に変じ、無より有に移らんとするものにて、卒突の変化、ただこれを改進と云ふ可らず。あるいは始造と称するもまた不可なきが如し。その議論の極て困難なるも謂れなきにあらざるなり」である（④四）。

しかし福澤はその困難さを厭うことなく、むしろそれを「偶然の僥倖」と位置づける。「今の学者は此困難なる課業に当たると雖も爰に亦偶然の僥倖なきに非ず」（④五）。何故か、それは東西両文明の経験可能が故に文明の実験において西洋より日本は優位に立つことができるからである。即ち「その次第を云へば我国開港以来世の学者は頻に洋学に向い、その研究する所、固より粗鹵狭隘なりといへども西洋文明の一斑は彷彿として窺い得たるが如し。また一方にはこの学者なるもの二十年以前は純然たる日本の文明に浴し啻に其事を聞見したるのみに非ず、現に其事に当て其事を行ふたる者なれば、既往を論ずるに憶測推量の曖昧に陥ること少なくして直に自己の経験を以て之を西洋の文明に照らすの便利あり。この一事に就いては彼の西洋の学者が既に体を成したる文明の内にいて他国の有様を推察する者よりも我学者の経験を以て更に確実なりとせざる可からず。今の学者の僥倖とは即ちこの実験の一事にして然もこの実験は今の一世を過れば、決して再び得べからざるものなれば、今の時は殊に大切なる好機と云ふ可し。試みに見よ、方今我国の洋学者流、其前年は悉皆漢書生ならざるはなし、悉皆神仏者ならざるはなし。封建の士族に非ざれば封建の民なり。恰も一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し。二生相比し両身相較し、其前生前身に得たるものを以て之を今生今身に得たる西洋の文明に照らして其形影の互に反射するを見ば果して何の観を為す可きや、其議論必ず確実ならざるを得ざるなり」（④五）。洋学者は漢学者ないし神仏に精通した学者であった。真に「一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」である。それだけに異質性の理解に勝り、議論は確実となる。福澤は負の状況を逆手にとって負よりは利となることを宣言し、どこまでも西洋の諸書を読みこなすことによって、日本の事情を客観的に位置づけ「真の文明の全大論」、即ち単なる世界史ではなくギゾーのいう“universal history of civilization”（文明の普遍史）[42]を著し、日本全国の有様を一新することに賭けているのである。しかもこの営為は持続的たるべきであり、自らもその一助

となることを福澤は決意するのであった。「蓋し余が彷彿たる洋学の所見を以て敢て自ら賤劣を顧みず此の冊子を著すに当て直に西洋諸家の原書を訳せず唯其大意を斟酌して之を日本の事実に参合したるも、余輩の正に得て後人の復た得べからざる好機会を利して今の所見を遺して後の備考に供せんとする微意のみ。但其議論の粗鹵にして誤謬の多きは固より自から懺悔白状する所なれば、特に願くば後の学者、大いに学ぶことありて飽くまで西洋の諸書を読み飽くまで日本の事情を詳にして益所見を博くして益議論を密にして真の文明の全体論と称す可きものを著述し、以て日本全国の面を一新せんことを企望するなり。余も亦年未だ老したるに非ず、他日必ず此大挙あらんことを待ち、今より更に勉強して其一臂の助たらんことを楽しむのみ」（④五―六）。

しかも、ギゾーやバックル、あるいはミルなどの参照に供した西洋の諸書を食物になぞらえ、自らの文明論が良説であるとすれば正にその食物が良であると述べ、さらに同僚、特に小幡篤次郎によって品価が増したことを付け加える。「書中稀に良説あらば、其良説は余が良説にあらず食物の良なる故と知るべし」、そして「此書を著すに当たり、往々社友に謀て或は其所見を問ひ或は其嘗て読みたる書中の議論を聞て益を得ること少なからず。就中小幡篤次郎君へは特に其謁見を煩わして正刪を乞ひ、頗る理論の品価を増たるもの多し」と述べるのであった（④六）。小幡は福澤の一番弟子というよりは兄弟分といわれる程、福澤にピタリと寄り添っていた同郷の士であり、その名の通り温厚篤実な士といわれているが[43]、これを勘案するならば、その食物に既に小幡が『上木自由之論』（私家版、明治六・一八七三年、後、『郵便報知新聞』明治八・一八七五年）と抄訳していたヘンリー・リーブが英訳したアレクシ・ド・トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』（Alexis de Tocqueville, *The Republic of the United States of America, and its Political Institution, Reviewed and Examined, [Democracy in America]*, Translation by Henry Reeves [*sic.*], With an Original Preface and Notes by John C. Spencer, New York: A. S.

Barnes, 1873. 福澤手沢本）[44]やスペンサーの諸著、例えば『第一原理』（Herbert Spencer, *First Principles of a New System of Philosophy*, 2nd Ed., New York: D. Appleton, 1875, 福澤手沢本）、それに『社会学研究』（Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, New York: D. Appleton, 1874、福澤手沢本）といった、福澤が後に読むことになる彼らの大著[45]、あるいは既に明治五（一八七二）年に邦訳が出ているミル著中村敬太郎訳『自由之理』（John Stuart Mill, *On Liberty*, 1870）などを加えてもよいであろう。無論、福澤が既にこれまでに援用した他の諸著、即ちフランシス・ウェイランドの『道徳哲学の基礎』（Francis Wayland, *The Elements of Moral Science*, 1835）同じく『政治経済学の基礎』（Francis Wayland, *The Elements of Political Economy*, Boston: Gould and Lincoln, 1856）[46]、あるいは教科書の類、例えばミッチェル『高校地理』（Samuel Augustus Mitchel, *Mitchell's School Geography*, 1866）やコーネル『高校地理』（Sarh Sophie Cornell, *Cornell's High School Geography*, 1856）、さらには事典の類であるブランデス、コックス共編『科学・文学・芸術事典』（W. T. Brande and George W. Cox, *A Dictionary of Science, Literature, and Art*, Vols., I, II, III, London, 1865）やリプレイ、ダン共著「新アメリカ事典」（George Riply and Charles A. Dana, eds. *The New American Cyclopaedia*, New York, 1866–1867）などを挙げることができよう[47]。

五　おわりに

これまで「緒言」についての考証を試みた訳であるが、通常、それは全文が完成した後に総括として執筆されるものであって、『文明論之概略』もその意味では例外ではない[48]。「明治八年三月二十五日、福澤諭吉記。」とあるのは、擱筆の年月日であり、「明治八年四月十九日許可著者蔵版」とあるのは、出版許可が下りた年月日であって、その間、一ヶ月に満たない。四月二十四日の島津復生宛書簡も既にみたように、その達成感が認められている。

従って内容的には『文明論之概略』本論の総論的位置づけないし、要約とも位置づけられるものであって、その圧縮された内容は、福澤の格調高い文章とともに、読み手に福澤の意図なり意気込みは云うまでもなく、そのエッセンスとも言うべき思いが内包されていよう。しかし具体的にそれを確認するには当然にも本論を紐解かなければならない。それについては別の機会に行うとして、今回はこれで以ってひとまず終えることとする。

（1）丸山眞男『「文明論之概略」を読む』上、岩波新書、一九八六年、iii—iv頁参照。尚、本稿は先に筆者が「補注・解題」の冒頭部（「一」「二」「三」）として福澤諭吉著・伊藤正雄訳『現代語訳　文明論之概略』（慶應義塾大学出版会、二〇一〇年）に掲載したものを論文形式にして大幅に加筆修正したものである。

（2）慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』第一巻、岩波書店、二〇〇一年、三三〇頁。以下本書簡集からの引用・参照は、同様の表記で記す。

（3）慶應義塾編『福澤諭吉全集』再版、第一巻、岩波書店、一九六九年、六〇頁参照。以下、本全集再版からの参照・引用は、同様の表記で記す。

（4）富田正文「後記」（④六七七—六七八頁）。

（5）中井信彦・戸沢行夫「『文明論之概略』の自筆草稿について」、『福澤諭吉年鑑2』一九七五年。

（6）進藤咲子『『文明論之概略』草稿の考察』福沢諭吉協会、二〇〇〇年。

（7）丸山前掲書、上・中・下、一九八六年。

（8）子安宣邦『福沢諭吉『文明論之概略』精読』岩波現代文庫、二〇〇五年。

（9）松沢弘陽「校注・解説」、岩波文庫、一九九五年。旧版岩波文庫（一九六二年改版）には津田左右吉「解題」・富田正文「後記」・遠山茂樹「諭吉を理解するために」が付されていた。尚、一九三一年発行の岩波文庫版初版の解題は石河幹明によるものである。また最近のものとして戸沢行夫「語注・解説」『福澤諭吉著作集』第四巻、慶應義塾大学出版会、二〇〇二年がある。

（10）*An Outline of a Theory of Civilization*, Revised Translation and New Foreword and Acknowledgments by David A. Dilworth and

G.Cameron Hurst, III, With Introduction by INOKI Takenori, Tokyo: Keio University Press, 2008.

(11) 伊藤前掲訳書。旧版名、伊藤正雄『口訳評注『文明論之概略』―今も鳴る明治先覚者の警鐘―』慶應通信、一九七二年。

(12) 伊藤前掲訳書、vii―viii頁参照。尚、伊藤正雄の福澤研究の意義については拙稿「福澤研究史における伊藤正雄」(『近代日本研究』第二十五巻、慶應義塾福澤研究センター、二〇〇八年)及び、これをも収録したもので、伊藤の遺族から甲南大学文学部国文研究室へ寄贈された福澤関連資料については木股知史編『故伊藤正雄教授文書の整理と研究』(甲南大学総合研究所、二〇〇九年)参照。

(13) 以下、福澤が手にして読んだことが明らかな書を福澤手沢本、その検証を要する書を福澤署名本とした。

(14) *General History of Civilization in Europe* by F.P.G.Guizot, With Occasional Notes by C.S. Henry, New York: D. Appleton, 1870, pp.21, 23, 24, 25.

(15) *History of Civilization in England* by Henry Thomas Buckle, Volume I, New York: D. Appleton, 1873, pp.21, 23

(16) 戸沢行夫「解説」『福澤諭吉集』第四巻「文明論之概略」、慶應義塾大学出版会、二〇〇二年、三六〇―三六一頁参照。

(17) 「文明」の文字があるのは「偽古文尚書」であって(加藤常賢『書経』上、明治書院、一九八三年、三〇頁)、そこに「濬哲文明、温恭允塞」とあり、蔡沈集伝『書経』によれば「深沈にして有知、文理にして光明、和粋にして恭敬、誠信にして篤実」(商務印書館蔵版、発行年不明)とある。ここは簡野道明『増補　字源』(角川書店、一九五五年、八二五頁)の解釈に拠った。

(18) 福澤の父百助も愛読し、諭吉も「其の蔵書中に易経集註十三冊に伊藤東涯先生が自筆で細々と書き入れをした見事なものがある。是は亡き父が存命中大坂で買い取て殊の外珍重したものと見え、蔵書目録に父の筆を以て、此の東涯先生書き入れの易経十三冊は天下稀有の書なり、子孫謹んで福澤の家に蔵む可しと、恰も遺言のやうなことが書いてある。私も之を見ては何としても売ることができません。是れ丈けはと思ふて残して置いた其十三冊は今でも私の家にあります」(⑦四〇)とある、父の形見として売却しなかった同じ―といっても東涯の書き込みはないが、また福澤家蔵書のそれも東涯自筆ではなく、その写しであり、現物は天理大学図書館に所蔵されていることが現在では分かっているが(河北展生『「福翁自伝」の研究　註釈編』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、四三頁参照)―程朱伝義『易経集註』の「周易」巻之九によれば、「文明以て止るは人文なり」を「文明に止まる者は人の文なり。止まるは文明に処を謂う。質必ず文有り。自然のこれ理。理必ず対待有り。

生生之本なり。上有るときは則ち下も有り。此れ有るときは則ち彼有り。質有るときは即ち文有り。一つも独り立たず。二つあるときは即ち文を為す。道を知る者に非んば、いずれが能く之を識らん。天文は天の理なり。人文は人の道なり」とあり（『易経集註』九、野田庄衛門、寛文四・一六六四年、二―三丁）、人の道が人文の究極であり、人文が文明ということになる。また巻之一「文言」にある「見龍田に在ると云うは天下文明なり」については「龍の徳、地上に見はるゝに於いては、則ち天下、其の文明の化を見るなり」と「伝」に、「本義」に「上位に在ざると雖も、然れども天下已に其の化を被る」とあり、「句解」によれば「龍見るときは則ち文采宣明なり」とある（同上、一、一五丁）。後者については天下も陽気の徳化に浴して文明に向かわんとすることであり、陰陽剛柔が交錯するのは天文であり、文明（離）で宜しきに止まる（良）のが人文であり、天文を観察して四時の変化を観察して明らかにし、人文を観察して天下の人々を教化育成すべきであると訳されている（高田真治・後藤基巳訳『易経』上、岩波文庫、一九六九年、九二、二一六頁参照）。また呉澂註によれば「文明なる者は、文采著名、人に在っては五典之敍、五礼の秩、燦然として文有り、而して其の止まるところに安んず。故に曰く、人文なり」（諸橋轍次『大漢和辞典』巻五、大修館書店、一九五七年、五九六頁）とある。

(19) 漢民族中心の中華意識が「華夷内外の弁」として範疇化したのは周代、特に春秋戦国以降であり、それが世界像として国際秩序観となったのは漢帝国以後とされる（平石直昭他編『丸山眞男講義録［第六冊］日本政治思想史　１９６６』東京大学出版会、二〇〇〇年、二二〇頁参照）。

(20) 貝原益軒「本朝の儒術古来二千歳、寥々たりといへども、太平日久しければ、世の人文もいよいよやうやく開けぬべし。しからば今より百年の後は、文字の習も拙からず、義理の学も大に明らかになるべし。文明の国となりて、誠に君子国の名にかなふべし。只今より後、学術の正しくしていやしからず、学者の志真実にして、聖人の道をあつくたふとび信ぜむことをこひねがふのみ」（『大和俗訓』、岩波文庫、一九三八年、八五頁、尚、自序によれば本書は宝永五年・一七〇八年に成った。）

(21) 例えば横井小楠は「方今万国の形勢丕変して各々大に治教を開き、墨利堅に於いては華盛頓以来三大規模を立て、一は天地間の惨毒殺戮に超えたるはなき故、天意に則て宇内の戦争を息るを以て務とし、一は智識を世界万国に取りて、治教を裨益するを以て務とし、一は全国の大統領の権柄、賢に譲て子に伝へず、君臣の義を廃して一向共和を以て務めとし、政法治術其外百般の技芸器械等に至るまで凡地球上善美と称する者は悉く取りて吾有となし、大に好生の仁風掲げ、英吉利に有っては政体一に民情に基づき、官の行う処は大小となく必悉民に議り、其便とする処に随て其好まざる処を強ひず。……其他俄

羅斯を初各国多くは文武の学校は勿論、病院、幼院、唖聾院等を設け、政教悉く倫理によって生民の為にするに急ならざるはなし。殆三代の治教に符合するに至る」（「国是三論」万延元年・一八六〇年稿、横井時雄編『小楠遺稿』再版、民友社、一八九八年、六一―六二頁）。また「道は天地の道なり。我国の外国のと云事はない。道の有所は外夷といへ共中国なり。無道に成らば我国、支那といへ共即ち夷なり。初より中国と云、夷と云事ではない」（村田氏寿「関西巡回記解説」山崎正董『横井小楠伝』上、日新書院、一九四二年、二九〇頁）と小楠は述べていたとされるが、これらは、文明ないし中華の機能概念的把握を通じて、欧米に中華なり文明を見出していることを現していよう。これらの点については植手通有『日本近代思想の形成』岩波書店、一九七五年、七〇―一一〇頁参照。

(22) 西村茂樹「西語解」一八七五年（日本弘道館編『西村茂樹全集』第二巻、翻刻版、思文閣、一九七六年、一二頁）参照。

(23) 文明と中華、それに進歩との問題については渡辺浩『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年、二一六―二六八頁参照。

(24) 但し「奔味不文の世」（the barbarous state）にある「配偶の婦人を視ること奴婢の如く」（the woman is the slave instead of the companion of her husband）に対応する、文明状態における“woman takes her right place.”は省略されている。Chambers's Educational Course, *Political Economy for Use in Schools, and for Private Instruction*, London and Edinburgh: William and Robert Chambers, 1873, p.6　但し、福澤が使用したのは一八五二年版である。

(25) *Ibid*, p.7.　初期福澤における「文明」については拙稿「『西洋事情』における「文明」と「進歩」―福澤諭吉の歴史哲学研究序説―」（『法学研究』第七十六巻第十二号）参照。

(26) ギゾー文明史の英訳がウィルペキアも含めて、未だヘンリーによる英訳と誤解されているのを見ることができるが、日本にあってはこれは永峰秀樹重訳『欧羅巴文明史』（明治七年～十年）にある「原書ハ千八百七十三新約克刊行ニ関リ「ヒストリー、ヲヴ、シヴィリゼーション、イン、ユーロープ」ト題シ即チ欧羅巴文明史ノ義ニシテ仏国文部卿兼巴里府「ファキュルチー、オヴ、リテラチュール」校史学博士タル「キゾー」氏ニ出テ、新約克府大学校理学兼史学博士タル「ヘンリー」氏ノ訳スル所ノ者ナリ」の凡例、及び各巻ごとの冒頭部にある「仏国　ギゾー氏　原著　　米国　ヘンリー氏訳述　　日本　永峰秀樹再訳」による（拙稿「ギゾー英訳者考」『福澤手帖』74参照）。なお匿名英訳者の「まえがき」によれば、一八三七年三月八日にオックスフォードで訳し終えたことが分かるが、註には第十四、ないし第十三・十四講は同一人物の手になる訳

ではないが、形を整えるために注意深く校閲しているとのことである（"Preface" in *General History of Civilization in Europe*, by F.P.G. Guizot, Second Edition, Oxford: D.T. Talboys, and 113, Fleet Street, London, 1838, p. ix）。

(27) 須田辰次郎直話によれば、大衆版ではない字の大きいものを須田から借りて「悉く読んで全篇書き入れをしたのが、今でも福澤家に遺つて居りませう」とあるが（高橋義雄編『福澤先生を語る諸名士の直話』岩波書店、昭和九年、一八一頁参照）、残念ながら目下、紛失している。

(28) ギゾーによれば、出来事の相互関係、紐帯、因果関係を記すもので、それは戦争や話りになる外的出来事と同様であり、判別が困難であり誤りやすく、読者に明示するにはそれなりに技術が必要であるが、こうした困難性はその本質を変えるものではなく、歴史の本質的な部分なのである。尚、福澤手沢本のこの箇所に赤の付箋紙が貼付されている。Guizot, *Ibid*, p.17. 参照。

(29) ジェームズ・ミルは英領インド史を著すにあたって、批判的歴史について、その意味するところは判断することであるとして、それを「判断史」（a *judging* history）とする。それでは何を判断するのか。答えは明らかであるとして、それを歴史的判断に伴うわずか二種類の問題であるという。第一は現に行われ、現に語られ、現に考えられた事柄として歴史家によって齎される「所説の材料（the matter of statement）」の問題であり、第二にその語り、行い、考えの現実がそれによって確かめられる「証拠となる材料（the matter of evidence）」の問題である。そして脚注においてそれは古くからあるものではないとして、最初の批判的歴史家としてBeausobreを挙げているが、より著名な「我らの偉大な歴史家」であるギボン（Gibbon）の次のような言説を引用している。即ち批判的歴史家の権利と義務は先人の見解を修正し、重んじ、選択することであり、調査研究に絶えることなく励み、理に適う智識の集積やすべての人が共有して使える事物の進展にいくらか貢献するとの望みをもつことである。James Mill, *History of British India*, Vol.I, 5th Ed., London: Piper, Stephenson and Spence, 1858, p. xviii 参照。尚、福澤手沢本のこの頁は二重の折がある。無論この啓蒙的歴史家もそこに登場する人物は人間性そのものよりも道徳的資質が問題とされるのであって、歴史は事例によって教える哲学であったのであり、そこに人間性は普遍的なものであり、変更不能な非歴史的な見解があったのである。Richard J. Evans, *In Defence of History*, London: Granta Books, 1997, pp.15–16 参照。

(30) バックルはそれまでの道徳的政治的省察を加えた事実の羅列の歴史から統計学などの新たな学問の登場によって、資料的裏

づけが加わり、総括的方法を用いての一般化を目指す歴史が可能になったとしているが（Buckle, *Ibid*, I, p.4 参照。尚、福澤手沢本のこの箇所には頁が折られていた形跡が残っている）、オックスフォード大学のフルード（James Anthony Froude）やケンブリッジ大学のキングズリー（Charles Kingsley）といった正統史学から見ればそれは歴史哲学と呼ばれるものであり、批判の対象であったのである。歴史が数理的な公式さを伴って科学的に連続的に還元されると信じたバックルはフルードにとってその文明史は歴史哲学であり、歴史は事実の集積でなければならないのであって、「科学的」自然から導き出されるものではないというものであった。G・P・グーチ著、林健太郎・林孝子訳『十九世紀の歴史と歴史家たち』下、筑摩書房、一九七四年、五二―六〇頁、Evans, *Ibid*, p.54 参照。尚、バックル文明史のロシアの文豪であるトルストイやドストエフスキーなどへの影響については拙稿「近代日本思想史におけるバックル問題」（一）『甲南法学』第四八巻一号参照。

（31）*Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. XIX, Toronto: University of Toronto Press, 1977, p.272、尚、中村正直は「風俗規矩之威権」と訳している。中村敬太郎訳『自由之理』第三冊、同人社蔵版、明治五年・一八七二年、二十五丁。

（32）Buckle, *Ibid*, I, p.96, 196 参照。尚、丸山眞男「福澤における「惑溺」」（松沢弘陽編・丸山眞男著『福澤諭吉の哲学　他編』岩波文庫、二〇〇一年参照。

（33）Buckle, *Ibid*, I, p.5

（34）Guizot, *Ibid*, p.248

（35）以上、ギゾーとバックル、及び『孟子』については松沢弘陽「注」岩波文庫、三〇七頁参照。「脈略」については朱熹集註『孟子集註』巻之三、吉野家権兵衛、元禄十三・一七〇〇年、六十二丁参照。

（36）Buckle, *Ibid*, I, p.5

（37）Guizot, *Ibid*, p.248

（38）ギゾーがフランス語訳に付した脚注が如何に権威をもっていたかは、ギボンの最良の版といわれるビアリー（J. B. Bury）版が刊行されるまで、英国版においても註として掲載されていたことからも理解できる。目下、最良の版といわれているのはウームズレイ（David Womersley）の手になるペンギン版（Edward Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, Edited, with an Introduction and Appendices, by David Womersly, Harmondsworth: Allen Lane The Penguin Press, 1994）全三巻本である。

(39) 荻生徂徠『政談』岩波文庫、一九八七年、三三一頁。初版は享保十二・一七二七年頃。

(40) 前掲松沢弘陽校註、三〇七―三〇八頁、及び『道春訓点大学』、花押のみ印されている故、発行所不詳・天和元・一六八一年、四丁参照。

(41) この点から福澤文明論を追求したものとして松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店、一九九三年、三〇七―三九五頁参照。

(42) 松沢前掲校註、三〇八頁参照、Guizot, *Ibid*, p. 19、尚、永峰秀樹は「万国ノ一大文明史」（前掲ギゾー氏著・永峰秀樹訳七丁）と訳している。

(43) 丸山前掲下、三一二頁参照。小幡篤次郎については、『近代日本研究』第二十一巻「特集・小幡篤次郎没後百年」慶應義塾福澤研究センター、二〇〇五年、一―一四一頁参照。

(44) 福澤の本書へのノートなどについては「参考史料　福澤手沢本 A.d. Tocqueville, *Democracy in America*, Tr. By H. Reeve 再現」（拙著『福澤諭吉と自由主義―個人・自治・国体―』慶應義塾大学出版会、二〇〇七年、一―五六頁）参照。

(45) スペンサーなど、福澤手沢本の世界については拙著『福澤諭吉と西欧思想―自然法・功利主義・進化論―』名古屋大学出版会、一九九五年参照。

(46) ウェイランドについては藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会・経済思想―近代日本、福沢諭吉とウェーランド―』日本経済評論社、一九九三年参照。福澤との関連では伊藤正雄『福澤諭吉論考』吉川弘文館、一九六九年参照。

(47) ミッチェルなど教科書の類と初期福澤については Albert M. Craig, *Civilization and Enlightenment: The Early Thought of Fukuzawa Yumichi*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2009,（アルバート・M・クレイグ著、足立廉・梅津順一訳『文明と啓蒙―初期福澤諭吉の思想―』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）参照。

(48) 本論から入ることによって緒言の意味がより一層明確になる点、丸山前掲下、三〇三―三一二頁参照。